

〈研究ノート〉

仕事・家庭・おとなへの社会化

工 藤 保 則

1. はじめに

本稿は「地方出身で都市部の大学に進学した女性の20代」についてライフコース論的に検討しようとする試みのひとつである。筆者は女性の20代の10年間で全体として把握するために、3人の女性に対して20歳時から10年間継続する予定でインタビュー調査を行っている。これまでのインタビュー結果の概要は2節で示しているが、本稿は27歳時点（大学卒業して5年）でのインタビュー結果を報告するものである。

今回のインタビューの1年前、つまり26歳時点のものを報告した工藤（2010）では、それまでのインタビュー結果とは受ける印象が大きく変わっていた。それはデニス・P・ホーガンのいう「人生上の移行」と関わっていると考えられたが、それから1年がたちどう変化したのか、「生涯発達」の視点や「おとなへの社会化」の視点から考えてみたい⁽¹⁾。

2. これまでのインタビュー調査の概要

本研究におけるインタビューの対象者は、石川県小松市出身の広部理華さん、福井市出身の青木理恵さん、岐阜市出身の宮腰英理さんの3人である。彼女らは出身県は異なるが進学した大学・学部・専攻は同じである。筆者はこれまで、その3人に対して、21歳時である大学3年生が終わった時点、22歳時である大学卒業の時点、23歳時である大学卒業後1年がたった時点、24歳時である大学卒業後2年がたった時点、25歳時である大学卒業後3年がたった時点、26歳である大学卒業後4年がたった時点、にインタビューを行い、その結果を、工藤（2004, 2005, 2006, 2007,

2008, 2010）として発表してきた。ここで、それらについての簡単な紹介を行っておく。

工藤（2004）では、10年間の予定で行うこの研究の問題設定、位置づけ、視点を示した。その上で、インフォーマントの紹介をかねた小中高時代のこと、3年生までの大学生活のこと、就職活動のこと、等についての3人へのインタビューの結果を示した。

工藤（2005）では、主に就職活動についてのインタビュー結果を示した。インタビュー時期は卒業式後の春休みであったため、既にそれぞれの進路は決定していた。広部さんは製薬会社への就職が決まり（インタビュー時は赴任地は未定であった）、宮越さんは名古屋市にある大手情報通信会社への就職が決まっており、岐阜市の自宅から通勤することになっていた。青木さんは福井市に帰って医療系の専門学校へ進学することが決まっていた。就職する2人は、希望した企業への就職であり、専門学校に進学する青木さんも含め、それぞれの話からは、高校までがんばって勉強をし、大学でも勉学・キャンパスライフをがんばって充実させ、就職活動（進学）にもがんばって取り組んできたという、がんばることが得意な彼女たちの姿が見て取れた。

工藤（2006, 2007, 2008, 2010）では、就職（進学）1年後、2年後、3年後、4年後に行ったインタビュー結果を示した。大きなライフイベントのひとつである就職活動をおえ、「自分にあった仕事」「自分のやりたい仕事」と思えた職業につくことができた彼女らは、その後、実際の職場ではどのように感じながら働いているのだろうか。そのことを捉えようとしたインタビューからは、やりたい仕事についてだけではいわゆる自己実現に

は至っていない彼女らの姿を見ることができた。当然のことながら、職場において何をどうすれば自己実現につながるのかわからずに、まずは目の前にあることをこなしているといった状態であった。だが、そのときに「この先には何かあるのだろう」という、気持ち、いわば「仕事の中の曖昧な希望」⁽²⁾ともいうべき気持ちを持ちながら、目の前のことに取り組んでいる様子が捉えられた。特に工藤（2008）では、3人とも、20代半ばの女性として、結婚ということを意識しながら、それと仕事との関係をどのように作っていかうかと考えていた。また工藤（2010）では、それぞれ、ライフコース展望と仕事の中の曖昧な不安や希望をすりあわせ、なんらかのおりあいをつけた上で20代後半に入っていくように捉えられた。

3. 大学卒業後5年経過時 インタビュー調査

本節では、大学卒業後5年経過した時点で行ったインタビューの結果を示す。対象者のそれぞれに対して2時間程度、半構造化インタビューを行い、「この1年間にあったこと。そのときの思いや考え」を語ってもらった⁽³⁾。

青木理恵さんインタビュー（2010年3月9日実施） 1年を振り返って

仕事は順調です。特に大きな問題もなく。基本的に仕事の内容は1年目も2年目も変わることはなかったです。1つ下の後輩が15人くらい入ってきました。入ってきたからと言って、自分が先輩としてがんばらないといけないというほどではありません。今年度からの新チームは6人なんです。8年目と6年目と4年目の先生と、わたしと同期の子と1年目の子という構成です。2年目の私たちで既に真ん中くらいになる若いチームなんです。上2人が経験もあって知識もある先生なので、自分の気持ちとしては1年目と変わらずやっています。去年も同じチームで指導者的なバイザーをしてきていた人が、2年目も同じチームだったので、分からないことがあればその人に聞けばいいので気楽でした。

仕事としては本当に特に問題もなく、単位数と

言って、どれだけ患者さんを治療したかという単位を時間で表すのですが、それも順調に平均以上は取れています。だから、特に変化もなく、事件もなく、なんです。1年目に比べたら、患者さんを受け持てる人数も増えて、後ちょっとで100人越えるんですよ。1年目に比べて倍くらいの人数を診ていますね。新規の患者さんが来て焦ったり、不安に感じたりというのはなくなって、だいぶ落ち着いてできるようになってきました。病気のことにについても前に診たことがあったり、チームのカンファレンスで出てきた疾患だったりと、経験を積んだ分、落ち着いてできるようになったのかもしれませんが。1年目は毎日が新しいことでしたから。

4年目の先生がかなりできる方なので、その人に頼り切っていたところもあるというのが反省することですね。もう少し自分で探っていったり、考えたりしたほうが良かったかなと思います。他のチームではしていない、チームでの勉強会も始まって、月に1回順番が回ってきて、ただ調べて話すだけでなく、もっと深く、何も見ずに説明できるくらいのレベルが求められました。しんどさはありましたが、厳しい勉強会があったおかげで勉強にもなったし、他の人の発表も聞いていておもしろかったですね。リハビリには理学療法士と作業療法士と言語聴覚士とがあるんですが、わたしは理学療法士で、今年は作業療法士がすごい数入ってきて、2年目になったら1年目と組むことが多くなって、1年目のときの先輩と組むのとは違って、ちょっとアドバイスをしたり、引っ張っていったりしなければならないところがありました。家族やケアマネさんとの仲介役などもせざるを得なかったもので、その辺はしんどかったです。先輩と組む機会があると、すごくホッとしました。でも、それは来年になったらもっと増えることですし、しょうがないことですよね。忙しい時期はありますが、何月に何をやってという仕事のリズムはないので、基本的にはやることは1年通して一緒です。

仕事のやりがい

やっぱり1番やりがいがあると思うのは、状態が悪かった患者さんが退院して、お化粧してき

ちんとした服を着て外来に来ているのを見るのことでですね。退院するときにもすごく感謝してもらえたりとか、家族さんからも感謝されたりとか、いい仕事だと思います。認知症だったり、色々な症状の方もいて、感謝の言葉を言われることばかりではないですが、自分が関与したことで状態が良くなったり、退院して行けるのを見るのはやりがいを感じます。発症直後の脳神経系疾患の人で、ベッドで腰掛けることもできなかったのが、経過が良く、段々と普通の所作ができるようになっていく過程には、いつでも感動します。患者さんと接していて嫌なことはあんまりないですね。本当にいい仕事だと思います。患者さんの家族さんから「この仕事はどうやってなるんですか。孫に勧めたい」と聞かれたりもしました。

入院して1週間、2週間、全く動かない人もいます。寝ていることの弊害で歩けなくなる。そういう患者さんは患者さんだけでは対応できないので、リハビリが介入することでまた歩けるようになります。でも、そういう人は看護婦さんの人手があれば、どうにか対応できる症例だと思うのですが、中枢の人や循環器系の方はPTの知識がないと改善できないと思います。上の先輩には「看護師や介護士でもできることをやっていてはダメ」とよく言われます。やっぱり「PTの視点でPTができる治療をしろ」と言われるので、それは強く心がけるようにしています。先輩は福祉用具の営業マンをしていて、専門学校に行き直してPTになった人なんです。おじいさんが入院している時にPTにリハビリを受けて、この仕事を知ったらしいです。頭のいい人だし、説得力もあるし、指導力もあるので、とても勉強になりますね。それでも、「まだまだ」と思うときのほうが多いですね。患者さんを診て、なんで歩けないとか、なんで動けないとかの分析、評価をするんですが、その時に上の先生から自分の気づかない視点で言われたり、どう治療するかというところで単調になったり、具体的なことが思いつかなかったりした時でも、先生にピッタリしたことを教えられたり、まだまだしますから。実習の時は症状を1つしか持たない患者さんを診ていれば良かったのですが、実際の患者さんは複数の疾患が混ざ

っていることがほとんどです。上の先生が常に新しいことを吸収していつている姿勢を見ると、ずっと勉強し続けたいといけなと思います。

結婚生活について

結婚生活は一緒に住み始めて2年になります。彼は今年の4月から前に講師として務めていた学校に専任教員として戻ることになったんです。10月くらいに試験があって、書類、筆記、面接が4次まであって、模擬授業もして、結構な応募者あったみたいなのですが、最後の1人に残れました。今の勤め先も気に入っていたんですが、後1年は専任になれることはないと言われていました。でも、ほとんどまわりの人がネイティブの人で、英語で他の教科を学ぶというコンセプトだったので、とても楽しかったみたいです。前の勤め先は生徒の雰囲気が一生涯懸命学ぼうという感じで、そこも楽しくて好きだったようです。だからどちらでも良かったんですが、専任で募集していたので前の勤め先を受けてみようと思ったみたいです。

生活は本当に毎日淡々と過ごしてましたね。土日は家事をして、平日は仕事をして。だから特に夫婦としては何もない1年でした。ただ、彼のお父さんが夏くらいに大きな病気になっていることがわかって、1~2ヶ月に1回と帰っていたので、その辺はショッキングな出来事でした。でも、遠いとあまり現実味がないというのもありました。それを知った7月はすごく落ち込んでいました。彼はそうでもなかったんですが、私は病気のステージも分かるので、落ち込みました。今は治療も一段落して、普通の生活を送れているみたいです。そういうこともあって、派手に遊ぶこともできなかったのもありますね。うちの両親も「そういう時はあまり派手なことをしないほうがいい」と言うので、家を買うのもまだ先になりそうです。

子どもについて

私が3年働いたくらいで産休が取れたらいいなと思うので、今年くらいに子どもができたらいいなと思っています。2009年の春に産休を取って復帰した先生がいて、一気にこの1年で結婚した人も増えたり、男性陣の奥さんが5、6人出産さ

れたし、女性陣も2人くらい復帰してきました。でも、見ていると本当に大変そうで、急なお休みも多かったです。それを見ていると、誰も文句を言う人はいなかったですが、急に代行を振られるので、自分のときのことを想像したらまわりの人のおかげなんだなあという気持ちを持ちました。その先生は病院の近くの保育所に預けて、病院の近くに住んでという人なので、私みたいに通勤してくる人で子どもがいる人のパターンはどんな感じだろうとは思います。とりあえず3年勤めて、産休に入るのが、自分の理想です。本当はもっと早く子どもが欲しいんですけどね。高槻は待機児童が多いみたいです。まだ先ですけど、高槻の子育て情報を見てしまいます。

まわりに出産する人がポチポチでてきて、子どもを産みたいと思う反面、絶対大変やなと思うし、自分の時間や自由はなくなるんだろうなと思います。きっと、今、想像しているよりも、共働きでの子育てはもっと大変なんでしょうけどね。これからのこと、30代、40代

30歳になったら、29歳くらいには子どもを産んで、産休を取って、子育てに没頭したいですね。仕事復帰は悩んでいるかもしれないですが、仕事もしているだろうなという感じがします。今みたいに働きやすい職場もないですし、復帰するなら今の職場に戻りたいです。保育園やその他のことがうまく行けばですが。上の課長さんも女性なので、そういうところは理解があるように思います。30代は仕事に関しては今の上の先生みたいに、後輩を指導できる能力を持てたいなと思います。40代、50代はピンとこないですけど、仕事を続けていたら、子育てをしながら高槻にいます。高槻はどちらの通勤にも便利なんです、家を買うには高いですね。京都にも大阪にも近いし、関大の新しいキャンパスができて地価も上がったみたいです。でも、お互いの実家も遠いし、そんな土地に何十年も暮らすというのはどうなのかなあと思ったりもします。リタイアしたら彼の実家の山口に帰っているかもしれません。

広部理華さんインタビュー(2010年4月16日実施)
1年を振り返って

結婚1年目だったし、新天地で働き出したりと、新しいことが2つもいっぺんにスタートして、落ち着かないままに1年が終わった感じでした。仕事に関しては初めての都市部での勤務で慣れるのがたいへんでした。職場に慣れるにも時間がかかりましたね。

結婚生活も一緒に住みだしたばかりだったので、いろんなことを折り合いつけながら、でした。本当に最初はケンカが絶えなかったんですよ。「ここにモノを置くな」とかお互いのルールをぶつけ合っていました。仕事にもまだ慣れないので、帰ったら帰ったで家が自分だけの空間じゃないということにストレスがたまりました。仕事に慣れてきたら慣れてきたで、今まで仕事で遅くなることは全然苦にならなかったんですが、結婚してからは仕事で遅くなると家のことが全くできなくなる。家に帰るのが10時になると夕飯を作るのもしんどくなるので、ある程度の時間で切り上げられるようになりました。

11月に赤ちゃんができたのがわかって、それからはつわりがつらくて、最初は営業にまわっていたのですが、ままならない感じだったので、いったん休ませてもらいました。気がついたら年明けで、契約の満期が3月だったので「どうしますか」と聞かれて、これでやっと辞められると思いました。情熱を注いできた仕事ではあったけど、「ずっと続けていけるか」と言われたらそれは疑問だったし、円満に辞めるにはこれ以上のタイミングはないと思いました。それで、この3月に退職しました。

仕事に関しては今までのがむしゃらに走ってきて、一社員として自分が期待されていることも理解した上でやってこられていたと思うのですが、結婚してからの1年はどちらに重きを置いていいのかわからなかった。バランスが取れませんでした。この1年、仕事の手を抜いたつもりはないのですが、結婚する前に時間をかけて積み上げてがんばってきた働き方と比べると、集中力も全然違いましたし、これで良かったのかなという一面もあります。これまでの自分を振り返ると、自分でも「がんばって

いたなあ」と思うのですが、この1年の自分を振り返ると、仕事にそこまで時間をかけられない、かけきれなくなってしまっていました。辞めるときに、「がんばってくれてありがとう」と言われましたが、「こんなもんじゃない」という気持ちがあって、「もっとがんばれる」と思うのですが、今はそこまでしかやれないし、うまくいかないなと思いました。

たぶん妊娠していなければ、辞めるきっかけをつかめないままに仕事を続けていたと思います。もしかしたら同じ業種でも子育てしながら続けられる勤務体制の会社があるかもしれないですけど、いまの会社だと、出産してからは絶対無理だと思います。嘱託であっても勤務時間は正社員と全く一緒ですし、そこらへんの配慮がないと難しい。同じ頃に妊娠した同期も後輩もみんな辞めましたね。妊娠してからは直帰させてもらえるようになって、仕事も早く切り上げさせてもらえるようになって、そこからは今まで早くても8時に帰ってきていたのが、6時半に帰宅できるようになりました。その1時間半って全然違うんですよね。今までできなかった家事も終わらせられるようになって、「これくらいの時間に常に帰れるのなら、家庭と両立できるのに」と思いました。でも、それはまわりが気を遣ってくれていたからこそできることですよ。

再就職のこと

もともと専業主婦にはなりたくなかったんです。いま出産を控えて家にいますけど、この先どうやって自分のやりたいことを探していこう、という形で復帰して仕事していこうと、それが思い描けないです。友だちの話を聞くと、どちらかの実家が近くておじいちゃん、おばあちゃんの助けが受けられて、仕事を続けられているんですよね。わたしの場合、両方とも地元ではない関西にいる以上は、自分で責任を持ってやっていかないといけないと思います。ただでさえ不景気で保育所が空いていないというのを聞くと、「どうやって再就職してやっていけばいいのかなあ」と考えます。自分のやりたいことを家庭と両立して実現していくかということが、これからの課題ですね。でも、もしわたしが金沢にいたとしても、い

ま祖母が介護状態なので母に子どもの面倒を見てもらえるかという、わからないんですけどね。

育て始めたら保育所とか、どうなっていくのかなと思います。ダンナさんの転勤もありますしね。ダンナさんが転勤族である以上は私が正社員で勤めるのは難しいでしょうね。自分としては大学まで出してもらって、仕事をやるならいろいろ目指して行きたいし、正社員としてやっていきたい気持ちはあるんですが、そういうのはきっとこれから難しいんだろうなと思います。教員の免許だけはありますが、それも非常勤講師とかそういう形でしか勤められないでしょうし。いまのMRの免許も、もし同じ業界に再就職しても、違う会社で自分も転勤族になってしまったら、さらに難しいですね。

本当に復帰するときはどう仕事を選ぶのか、悩みます。退職するときには会社の人も「本当に良かったね、後は旦那さんにがんばってもらってゆっくりしなよ」という感じでした。1日家にいろいろやっているのアツと言う間に過ぎるんですが、やっぱり家にいると誰とも会話しないし、会社にいると一社員としての存在を確認できたのに、なんなんだろうと思います。家をキレイにしても、自分が見えなくなってしまうそうです。社会と関わっていたいなと思うんですけどね。

子どもの教育

旦那さんが転勤族ということで、子どもも一緒に転校していかないといけないわけじゃないですか。そういうことも正直不安です。今いるのは都市部なので、先輩の子どもは私学受験をしているんですよ。私は子ども自身が自分が育ったところが「良かった」と思える地方で子育てはしたいなと思うので、「早く地方に転勤になればいいのに」と思います。いっそのこと旦那さんの故郷の北海道とかに行ってしまいたいですね。

子どもの進学のことは難しいですよ。都会にいます方が一見選択肢は豊富に思えるけれど、私学にいれてしまうということは中高大の10年間を同じ学校で過ごすということですよ。それは逆に、選択肢が狭まっていることになるんじゃないかと思います。地方であればその時々を考えて選択していけるので、その方が選択肢は広がるんじ

やないかと。子どもの学校にしても、いろんな友達がいて、いろんな考え方の人がいて、いろんな境遇の人がいる学校生活のほうが、結果的に選択肢が広がるんじゃないかと思います。都会にいと選択肢がありすぎて考えないといけなことが多すぎますね。子どもが「行きたい」と言って私学に入れるのか、親が「入れたい」と思って入れるのかも違うと思いますし。親が敷いてくれたルールが自分の思い通りならそれでもいいんでしょうが、それが違うのなら辛いですね。友だちと年末に会った時に、「今の環境で仕事をしていこうと思うのなら、今、子どもを産むのは難しい」と言っていました。わたしも仕事から脱出できで良かった反面、考えることが増えてしまいました。

30代、40代、これからのこと

30代になった自分、どうしてますかね。もしかしたらもう1人くらい産んでいるかもしれません。これからの方向性が見えないなら、今のうちに産んでおこうと思っているかもしれませんね。遠いと思っていた30歳が近くなっていますね。35歳や40歳の自分はさすがに外に出たいなと思います。家を建てて、旦那さんは単身赴任でどこかに行っているかもしれませんが、家族の生活基盤を作って働きに出たいですね。とにかく今は目標みたいなものもなくなって、やりたいこともわからないし、それをどう実現していくかもわからないです。先のことが全てボンヤリしています。社宅とか手当が手厚くて、引越し自体の負担が低くなっている分、定年を迎えたときに家も故郷もないということになりかねない。それは嫌だなと思います。子どもが中学になるくらいには、自分達の故郷になるところに家を建ててやっていきたいです。本当、いろいろ考えないといけません。

来年のことは全く思いつかないです。就職活動するにしても「どれくらい働けますか」って聞かれてもこたえられない。やっぱり手に職系を考えないといけなこともありますが、やりたいことも見つからないですね。でもお勤めして、旦那さんが転勤するから辞めるってことになるのか。今までは自分1人の生活としていろいろと悩

んでいましたが、選択肢もいろいろあり、自由だったと思います。1年たって、家庭のこととか色々考える中で、「自分のやりたいことを実現していくのは難しいんだな」と思います。

宮腰英理さんインタビュー(2010年3月27日実施) 1年を振り返って

担当するエリアは変わっていないんですが、代理店の営業担当から、営業の企画をする内勤に変わりました。代理店に勤めるお姉さん達に営業している人のためのサポートや、お姉さん達を育てる研修のカリキュラムを考えたりしています。元々やりたいことだったので、ちょっと嬉しかったんですが、この人事は予想外でした。

CS、カスタマーズサービスってトレンドですよ。私たちの業界って、うちの会社もそうですし、他の企業も「お客様に対して満足を高めよう」と意識は、正直薄かったんです。小売とかには元々あったと思うんですが、携帯業界はなかなか持っていなかったんです。でも業界が厳しくなってきた、「これではダメだ」ということになって、「全社的に改善していこう」という試みが始まったわけです。今までは販売台数第1で「とにかく売れ売れ」という姿勢から、「既にいらっしゃるお客様にいかに満足していただいて、いかに長くご利用いただくか」というスタンスに変わってきました。もう既に1億台くらい売っているので、赤ちゃんから大人まで1台ずつ持っている計算になり、そうなるパイの奪い合いですよ。そこで販売台数はもちろん大事だけど、その軸もしっかり確保しつつ、CSも高めていこうという姿勢に変わってきました。

ところが、今までCSで働いてきた人たちというのは、内勤だし、成果がハッキリと目に見えないので、やってもやらなくてもいい仕事だったんですよ。でも、今の支店長や部長が「それではダメだ」と言い出して、「元々営業をやっていた者で誰か」ということで考えたようです。私はキャリアも2年たっていたし、会議でもCSについては「おかしいですよ」と発言してもいたので、6月にまさかの内示を受けました。私は受け持つお客さんは変わるだろうと予想していたの

ですが、まさか部内異動があるとは思っていませんが、本当にビックリしました。わたしも以前はCSというのは、どちらかと言うと、「仕事は定時で帰って、やれることしかやりません」というスタンスの部署だと思っていました。でも部長の話を聞いていると、部長の意図していることは2つあって、「CSを重視して行きたいので若手の営業経験者に入って欲しい。そして、雰囲気を更新して欲しい」ということだったんですよ。部長はモチベーションのつけ方がとてもうまいので、そんなふうにおっしゃっていただいて、そこまで期待されているのならばがんばるしかないなと思い、課長と相談して7月異動ということになりました。

仕事へのスタンスの変化

人は変えられないということを7月以降再認しました。前向きにがんばろうとは思っていますが、一方で「こんなものなのかな」とか、「人は変えられないんだから、変えられるところを変えよう」というのが、成長したことなのか、モチベーションとか意志が弱まっているのしたことなのか、自問自答しないといけないなと思っていますが、やり方としてはスムーズなやり方を手に入れていると思うんです。主張するだけではなくて、あらかじめネゴっておくとか、そういう部分は成長しています。でも、どこかでうまいこと手を抜く方法も覚えている気がします。そういうことを感じるのです、社内のセミナーや社外の会議に自分から進んで行くようにしています。4年間は会社という組織の中でどういう人がどういう人で、どういう組織に誰がいてという人間関係を構築することに特化してきたんですが、5年目の私は社外に目を向けていないと、自分自身のモチベーションも成長度も止まってしまうんじゃないかと思うようになりました。

最近、「どの部署に行っても、自分は仕事を楽しめるんじゃないか」と思うようになりました。学生の頃は理想だけ描いていたところがあったと思います。私はいま企画にいて「いいところにいるね」と言われますが、そこでの仕事は学生の時に考えてたものとは全然違います。確かに自分で考えて立案はしますが、それからは業者にコンペかけて予算を取って、決裁切って、そんな事務処

理ばかりです。

この頃思うのですが、私は、本当にやりたいことというのが自分になくても、与えられたポジションで目標を達成することに生きがいを感じられるタイプなのかもしれません。自分が何をやりたか聞かれたら、こんな部署に行きたいという希望はありますが、じゃあこのポジションはダメなのかと言われたときに、そこでもひょっとしたら意義を見出せるのかもしれない。ザ・企業人と言うか、いい駒だなと思います。それが「成長なのか退化なのか」と聞かれると、「もしかしたら退化なのかもしれない」と思いますが。

今の仕事は今の仕事でベストを尽くす。そこから得られるものも何かあるだろう。私は苦しみながらも苦しみが喜びに変わるタイプですから。まわりの人がやってくれなくても、自分に仕事があるのが楽しくてしょうがない。この時間までにこれをしなきゃならないと思うことで、テンションが上ってくる。発想がとてもポジティブになりましたね。それもこれも、昨年から思っていることですが、まわりの人のおかげなんですよ。人間なんていろんな人がいて、その人自身がどうというよりは、その人を映して自分がどうありたいか。

以前は、他人に期待していることが多かったように思います。それを求めていたと思います。うちの会社が他社に比べて緩いというのは分かっていますが、緩いと言っても、「会社の中でやることをやってきた」と言えることが大事なんで、うちの会社で実績を積みば、他社に行っても、やれるだろうと思います。昔の私みたいに「うちの会社が緩いから他社に行って実力を試したい」というような気持ちの人は、私が他社の経営者ならそんな人はいらないし、他に移っても潰れていたでしょうね。

この人にはこういう持っていき方をしたほうがいいのか、この人にはこういう言い方で言った方がいいとか、変えるようになりましたね。今までは手段が目的に変わってしまっていた。最近はプライベートでも仕事でも、何が目的なのか、目的のために手段を変えることはしょうがないと思っています。27歳にしてようやく自己が確立できたような気がします。

ガールズトーク

仕事は順調、なんですかね。楽しくはあります。例えば社内でも、全国で見た時に刺激を受ける人もいるので、そういう人達と集まって意見交換をしようとがんばろうと思えますし。去年の新入社員研修の時に知り合った人達とは、未だに付き合いがありますね。ちょうど先週、その時の女の子達と東京に行って、先輩の家に泊まらせてもらいました。先輩はダンナさんもいて、都内にマンションを買っていて、成功者なんです。そういう人の話を聞いて、仕事の進め方とか、女としての生き方とか、何を大事にするのかとか、寝ずに話をしていて、「久しぶりにこんな時間を過ごしたな」と思いました。そのグループでは私が1番下で、1つ上が1人、2つ上が4人です。いわゆるアラサーですよ。昼の2時くらいからワイン片手に訪ねて行って、朝の5時までです。尽きないです。「女はすごいな」と思いました。メンバーは日本各地で働いているので、羽田集合でした。仕事の話がメインと言うよりは、5人中2人が既婚で、3人が未婚だったので、「なんで結婚したのか」という話や、「結婚するとはどういうことか」とか、「仕事を続けながら結婚するにはどうあるべきなのか」とか。結婚した人達は出産のことにまで悩みがいているので、「仕事を続けながら出産するにはどうすれば良いのか、いつぐらいのタイミングで出産するのがキャリアビジョンとしては描きやすいのか」という話をしました。「人間にとって、何が幸せなんだろうか」というような話もしましたね。

恋愛と結婚

プライベートは何も変わりがなく。両方の親から「もうそろそろ」と言われていて、親同士も結構前に会っているんです。そこからも全然話が進まなくて、彼は親同士が会うという重みについてはなんとも思っていないくて、「別に付き合っているんだから、親同士会ってもいいんじゃない」というぐらいのことだと思っているんですよね。常日頃から「日本の慣習とか習慣とかには囚われたくない」というのが彼のモットーなので。うちの親からしてみれば「何を考えているのかわからないし、いい加減にしろ」と私に何回も言って

くる。私は板ばさみなんですよ。親は「自分のことなんだからもっと真剣に向き合いなさい」と言うのですが、私だけで決められることではないし。でも、自分自身もどうしたいのか、よくわからない。社会人になって初めて付き合って、5年くらい付き合っているの、今までは他の人を見ることもしてこなかったですし、機会もなかったんですよ。

事実だけ見れば、去年と何も変わらず、なんです。その中の想いはいろいろと変わりました。最初付き合った頃は先輩と付き合っているというステータスもあったと思いますし、教わることも多かった。「先輩に追いつきたい」とか、「先輩に好かれる女になりたい」とか思ってたんですけど、5年も付き合ってくると相手のいろんなこともわかってきて、自分ががんばらなくてもいいし、「そもそも自分ががんばる必要ってあったのかな」って。彼もなんとなく「結婚しない」というプレッシャーを感じているみたいではありません。社内的にも5年も付き合ったら、「お前らどうなんだ」という感じになってくる。余計なお世話なんですけど。実際のところ、私が本当に結婚したければ、「結婚しよう」と強引に進めていくと思いますし、そうしないということは、私自身もそれほど「結婚したい」と思っていないのかもしれない。

自分自身を磨いたり、投資したりすることは楽しいし、でも結婚もしたい。いや、結婚をしたいというよりは子どもを産みたい。しかもそれは育てるということに対する生きがいと、老後とか、そういうことのためですよ。子どもも自分のため。きっと仕事だけだとずっとブレル時がくると思う。子育てで自分が成長していけることもあると思うので、それが欲しい。親友の親も私の親も「仕事の話は聞き飽きた。そんなところに幸せはない」と言うんですよね。顔を合わせる度に言われるんです。「将来の仕事のビジョンの話は何回も聞いた。結婚の予定はないのか」とそればかりですよ。特に祖母なんて、さらに堅いですから。それなのにテレビの影響なのかなんなのか、「逆でもいい、できちゃった婚でもいいから、結婚してくれ」と言い出しましたからね。「ああかわい

そうだな」とは思うんですけどね。

4. 30 歳に向かって

大学を卒業して4年経過した26歳のインタビュー結果を示した工藤（2010）において「今回のインタビューでは大学卒業後1～3年目に行ったものとは何かが違うように感じられる」と述べたが、その印象は今回さらに強くなった。将来のことが今のこととつながりながら、はっきり描かれるようになったと感じられる。このように印象がかわったのは、調査対象者それぞれの価値観がかわったからかもしれない。

価値観の変化には、関係性がさせるもの、制度がさせるもの、年齢がさせるもの、があるだろう。もちろんその3つはたがいに関係しあっているのだろうが、ここではそれぞれ独立したものとしてとらえ、中でも年齢がさせるものを手がかりとしながら、インタビューから感じられる印象の変化について少しばかり考えてみたい。

対象者の27歳という年齢を点でなく線で考えたならば、就職から数年がたち職業的社会化が一段落するとともに、30歳が視野に入ってくることによりおとなへの社会化の比重が上がってきたとき、とすることができるだろう。おとなへの社会化とは、工藤（2010）で述べたように成人期への社会化とほぼ同じように用いているが、あえて「おとなという社会集団」が存在するという意味を込めて使っている。また、宮本みち子も指摘するように（宮本2004：240）、成人期が心理的・自分志向の成熟となりつつあるこの時期の社会化を特に意識して、おとなへの社会化としている。心理的過程となったとき、その社会化の捉え方はより難しくなるが、そういう中、ひとつの区切りとして意識されるのが30歳という年齢ではないだろうか。

レビンソンの「人生の四季」研究は、30歳前後の頃に注目したものである。レビンソンは成人前期のひとつの状態として22歳～28歳を「大人の世界に入る時期」とし、職業・異性・仲間関係・価値観など初めて選択したものへの試験的な関与の時期といている。そうであるなら、その後にかえる30歳前後という時期は、おとな・成人

として職業・異性・仲間関係・価値観などで選択したものへ本格的に関与する時期ということができらう。だとすると、今回の対象者の年齢である27歳は、30歳が視野に入ること、意識して準備をしながら、その本格的な関与へ入っていく頃と考えられる。つまり30歳になるということが、点ではなく、20代後半からの線として捉えられ、助走をしながら向かっていこうとする頃が今回のインタビュー時だと思われるのである。線として人生を捉えることが可能となることで、30歳から先のことも同一線上のこととして考えられるようになったと思われるのである。今回のインタビューでは、その新しい流れ、おとなへの社会化の流れが感じられた。

筆者は以前に、10歳前後の子どもについての研究を行い、その頃を「子どもでもおとなでもない時期への入り口」とした（工藤1998）。それと同じように表現すると、「30歳前後はおとなへの入り口」となるかもしれない。これからの数年のインタビュー調査ではそのことを意識しながら実施し、現代社会における「おとな」や「おとなになること」について考える材料としたい。

注

- (1) 「生涯発達」の視点は森岡・青井（1987）に詳しい。また「おとなへの社会化」の視点は4節においてあらためて説明する。
- (2) 「仕事の中の曖昧な希望」というのは、玄田（2001）を参考にしての表現である。
- (3) インタビューはそれぞれの自宅ちかくの喫茶店で行った。

参考文献

- 玄田有史, 2001, 『仕事の中の曖昧な不安』中央公論新社
- Hogan, D. P., 1981, *Transition and Social Change ; The Early Lives of American Men*, New York : Academic Press
- 工藤保則, 1998, 「子どもの関係性の変化に関する一考察」『ソシオロジ』第43巻1号
- , 2004, 「『女性の20代』研究序説」『仁愛大学研究紀要』3
- , 2005, 「大学4年生の風景」『仁愛大学研

究紀要』4

———, 2006, 「大学卒業1年目の風景」『仁愛大学研究紀要』5

———, 2007, 「大学卒業2年目の風景」『仁愛大学研究紀要』6

———, 2008, 「大学卒業3年目の風景」『仁愛大学研究紀要』7

———, 2010, 「仕事・結婚・人生上の移行」『龍

谷大学社会学部紀要』36

Levinson, D. J., et al., *The Seasons of a Man's Life*, Alfred Knopf. (南博訳, 1980, 『人生の四季』講談社)

宮本みち子, 2004, 『ポスト青年期と親子戦略』勁草書房

森岡清美・青井和夫編, 1987, 『現代日本人のライフコース』, 日本学術振興会